

23. 経皮経肝的塞栓術を施行したシャント型肝性脳症の1例

田中政道, 斎藤正明, 平沢雄一
片平裕次, 佐藤重明 (鹿島労災)

症例は74才女性。食欲不振に引き続き、突然の意識障害をきたし、器質的な脳病変はなく、血中アンモニアの高値及び肝機能正常ということよりシャント型肝性脳症を疑い、画像診断によって肝内門脈肝静脈短絡と診断した。治療として肝内門脈枝に対して経皮経肝的塞栓術を施行した。術後意識障害の改善、血中アンモニア値の低下を認めた。また門脈圧の上昇、他の短絡路の出現を認めず、現在無治療にて外来経過観察中である。

24. 難治性肝性脳症に対して塩酸バンコマイシンが著効を示した1例

宍戸英樹, 石井 浩, 中村広志
木村邦夫, 西荒井宏美, 森 義雄
山本駿一, 家里憲二, 吉田弘道
長谷川茂, 伊藤一茂
(千葉社会保険)

難治性シャント型肝性脳症に対して塩酸バンコマイシンの経口投与が著効した1例を経験した。他の保存的治療が奏功しない場合、内科的治療の最後の切り札として使用する価値があると思われる。しかし、塩酸バンコマイシンは高価であり、しかも保険診療上の問題、長期投与上の問題もあり、今後、本症例を含め、こういった症例をどのように扱っていくかが問題である。

25. C型肝硬変に合併した胆管細胞癌の2例

浦木 茂, 三上 繁, 清水史郎
秋本政秀, 福永和雄
(キッコーマン総合)

症例1: 60歳男性。肝機能障害を指摘され来院。C型肝硬変と診断。肝S3に径26mm, S7に径38mmの腫瘍を認め、超音波映像下組織診にてS3の腫瘍は肝細胞癌, S7の腫瘍は胆管細胞癌と診断され開腹手術を施行。症例2: 65歳男性。C型肝硬変等で通院中に肝外側区域に径30mmの腫瘍を認め、超音波映像下組織診にて胆管細胞癌と診断され開腹手術を施行。肝硬変に合併した胆管細胞癌を2例経験したので文献的考察を加えて報告した。

26. 経皮的エタノール注入療法にて止血し得た肝細胞癌破裂の1例

奥富善之, 斎藤博文, 宮内智夫
山田修司, 関 浩孝, 駒 嘉宏
桜井 渉, 鈴木紀彰, 森 博通
福山悦男 (君津中央)

肝細胞癌(HCC)の腹腔内破裂は出血性ショックや肝不全に陥ることが多く、致死率が高い。一般に経カテーテル肝動脈塞栓療法(TAE)が行われ、良好な成績が得られているが、今回、われわれはTAE不能例に対しdoppler US下、経皮的エタノール注入療法(PEI)にて止血し得たHCC破裂の1例を経験したので若干の考察を加えて報告した。

27. 肝シンチグラフィにて集積を認めた腫瘍径6cmの高分化型肝癌の1例

木村敬太, 宍戸忠幸, 品川 考
飯野康夫, 宇梶晴康, 一戸 彰
(上都賀総合)

病理組織像より高分化型肝癌と診断されたが、画像上

- ① 腫瘍径6cmと大型である。
- ② 肝シンチグラフィ(アシアロシンチ, フチン酸シンチ)にて集積が認められる。
- ③ 門脈造影下CTにて腫瘍内に門脈血流が認められる。
- ④ 超音波, MRIにて腫瘍内に門脈枝が認められる。など特異な所見を示した症例を経験したのでここに報告する。

28. フェリデックスを用いたMRIにより描出が明瞭となった良性肝細胞性結節の1例

○黒田泰久, 甲嶋洋平・倉田秀一
水本英明, 鈴木泰俊
(船橋市医療センター)
近藤福雄 (千大)

症例は60歳男性で、USにて肝S2区域に径37×25mmの腫瘤を指摘され、Dynamic CT・CO₂-Angiographyによって比較的血流に富んだ結節性病変が考えられたが、血管造影において結節周囲の動脈に異常を認めず、Feridex-MRIにより周囲肝と同様に結節内に均一なKupffer細胞の存在が証明されたため、肝細胞腺腫あるいはFNHが考えられた。しかし、US・CTなどで硬変肝の所見が認められたため、肝細胞癌を完全に否定できず、手術選択となった。術後の病理所見から良性の結節であることは判明したが、典型的な肝細胞腺